
微笑みの詩

ここたそ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微笑みの詩

【Nコード】

N7833Y

【作者名】

ここたそ

【あらすじ】

スーツ店に勤務する西浦詩衣が、小学校のクラスメイト後藤篤紀と偶然再会し自然と付き合うことになる。しかし篤紀には忘れられない女性がいた。

2人の女性の間で気持ちが揺れ動く篤紀と、篤紀の全てを受け入れようと懸命になる詩衣のラブストーリー！。

空白

8時45分。一人暮らしをはじめた時に買った、お気に入りのシヨッキングピンクの目覚まし時計が今日も鳴る。

寝ぼけた目をこすり、天井を見上げる。

レースのカーテンから日差しがさしこむのを何となく眺めている。ふと我にかえる。

そうだもう彼はいないんだ…

毎朝自分に言い聞かせるのが、知らぬ内に朝の日課になっていた。空っぽになった、ベッドの左側を少し眺めた後、詩衣は珈琲を入れるためリビングへと向かった。

通勤ラッシュが少しおさまってきたところ、詩衣は埼京線に乗り新宿へと向う。

4両目にある2番目のドア付近の空席、ここが定位置だ。

平日だというのに、人であふれかえっている改札をぬけ甲州街道を10分ほど歩くと見えてくるそのビルの1階と2階が詩衣が勤務しているスーツ店だ。

少し古くなったそのビルの裏口からエレベーターに乗り2階にある従業員の休憩室へと向う。

少し遅れてやってきた、同期の大川知里おおかわちさとに声をかける。

「おはよう。昨日話してたワンピース可愛いの見つかった？」

「全然だめ。このままだと友達の結婚式に来て行くやつみつかない。ね！次の休日探す

の付き合って！」

2年前、地元の青森から就職のため上京してきた詩衣にとって、同期の知里はじめてできた東京での友達だった。

以来、知里とは仕事の話からプライベートなことまで何でも相談できるよき仲だ。

こんな知里と毎朝他愛もないことを挨拶代わりに話すのが詩衣の楽しみの一つだ。

おしゃべりもほどほどに、30分ほどの朝礼を終えると店内は開店準備に追われ各々が持ち場につく。

詩衣が清掃している焦げ茶色のフローリング

の階段を少し小走りに店長が下りてゆき、自動ドアのスイッチを入れる。

開店前から待っていた客がちらほらと店内に吸い込まれていく。

その客を笑顔で迎えることから、詩衣の毎朝の業務が始まる。

その日もそのように平凡な毎日がスタートした。

この時は想像もしていなかった。

その数時間後に彼に再会することを…

予感

後藤篤紀ごとうあつこのりは、飯田橋にある医療器械メーカーに勤めていた。社員は約300名ほど。その中でも営業を担当している篤紀は、日々都内の医療機関に自社商品の売り込みに通っていた。

その日は9月も下旬だというのに、やけに蒸し暑い日だった。

- のびてきた髪の毛のせいだろうか、地元の青森じゃ考えられない暑さだな -

そんなことを考えながら、篤紀は新宿にある小さな個人病院へと向かっていた。

新しく開発された心電図の導入をあつさり断られてしまい、踏んだり蹴ったりだなと思いながら病院を後にした時、ふと自分の革靴がだいふ磨り減っていることに気づいた。

どこかで靴を新調し、今日はそのまま帰宅しようと思った。

…ふと篤紀はあることを思い出した。

昨日の同僚の話で、新宿にある若者向けのスーツ店に行ったがなかなか雰囲気がよく価格もお手頃でラッキーだったと喋っていたことだ。

すぐさま篤紀はその同僚に電話をし、そのスーツ店の場所を事細かに聞くと、少しだけ駆け足でその店を目指した。

再会

時刻は夕方5時を過ぎ、会社帰りであろうサラリーマン達でその店は賑わっていた。

詩衣は入り口のすぐ横にある、3段に並んだネクタイ棚の品数を確かめ商品を補充した。

- 今日の売れ行きもおそらく前年比くらいだろうか -
そんなことを思いながら手だけを動かしていた時、どこか懐かしい顔をみかけた。

彼はネクタイコーナーの斜め右にある、革靴が陳列されているスペースで、少し前かがみになりながらタッセル付きの革靴を眺めていた。

なぜだろう、その男性がとても懐かしく感じたがすぐには誰だか思いだすことが出来なかった。

「すみません！」
ふいにその男性が若干興奮気味の声で、右手をあげながら定員を呼んだ。

男性があげた右手からはほどよく筋肉のついた手首と、スーツからすこしはみ出たオフホワイトのシャツがのぞいていた。

詩衣は彼のもとにかけより、「こちらのシューズ履かれていますか……」と言いかけたその時、彼の動きが止まった。

どうしたんだろう…不思議に思い彼をしてみる。

彼は詩衣の細い首筋にかけられた社員証をその鋭い眼差しでみた後、
やっと言葉を発した。

「やっぱり！…西浦だよな？」

焦燥

その声を聞いて、私はやっと気がついた。

男のわりには2音だけ高くしたような、いや…金属音のような声だった。

「…西浦？」

私の反応がなかったので不安になったのだろう。今度は先程よりも少しだけ小さな声で篤紀は詩衣に呼びかけた。

「…久しぶりだね！」

あまりにも急で現実を受け止めるのに必死だった詩衣にとっては、その台詞を絞り出すのが精一杯だった。

それでも詩衣は、心の片隅にずっと前からおき忘れていた感情が身体の中から沸々と湧き出てくるのを感じずにはいらなかった。

―後藤篤紀は、西浦詩衣にとって初恋の相手だった―

いや、訂正しよう。10年前…当時は自分が篤紀に恋をしているとはあまりにも幼く自分自身気づいてなどいなかった。

つまり、今にして思えば詩衣が恋を意識し始めたのは篤紀が最初の相手だった。

「元気にしてたか？小学校以来だな！」

こっちの気持ちはまだついていけないのを他所に、篤紀は右手で髪

をかきあげながら話しはじめた。

やっとのことで詩衣も少し落ち着き、それから二人はお互いの近況を報告しあった。

その間中、詩衣は懐かしさと…ときめきを感じずにはいらなかった。

進展

池袋西口をパルコ方面へと向かう途中にその喫茶店はあった。雑居ビルの3階にある「砂時計」という名の喫茶店は、マスターがいてくれるキリマンジャロが売りだ。

篤紀は窓際のソファ一席に腰を下ろしていた。

少し冷めた珈琲をすすりながら、窓から見える横断歩道を眺めていた。

土曜日だからだろうか、窓からは子供連れで歩く人が目立った。

「もう一度、今度はお茶でもどうかな？」

西浦詩衣から誘われたのは、新宿のスーツ店で再会したあの日から一週間後のことだった。

仕事を終え、家に着くとまずシャワーを浴びる。その後キンキンに冷えたビールをこれでもかというくらいに一気に飲み干す。

お決まりの儀式を堪能している時にその電話はかかってきた。

正直、意外だった。

あの日連絡先を交換したけれどもまさか本当に電話がかかってくるとは思ってもしなかった。

というのも、篤紀の記憶だと詩衣はどちらかといえば受け身なタイプの女の子だったからだ。

綺麗に雑草が抜かれた小学校の校庭で、6年1組の生徒はよくドッジボールで遊んだ。

いつも自分から友達を誘い一番に校庭に向うタイプの篤紀に比べ、詩衣は誘われるのを待っているような子だった。

だからだろうか。今、詩衣の方から誘われてここに座って彼女を待っているのに少し違和感を感じた。

そんなことを考えながら、珈琲をもう一杯おかわりしようと思スタ
ーの方を向いた時に、ウッド調の扉にかけられたベルが鳴った。

動悸

「すごい！そんな偶然なかなかないよ！」

休憩所に興奮気味な知里の声が響く。

「…そうかな？」

ややおっとりとした口調で、そしてちょっとはにかんだような表情を浮かべながら詩衣は返事をした。

「絶対そう！運命だよ運命…早く次合う約束とりつけなよ、鉄は熱いうちに打てって言うじゃん」

せつかちな知里がそのように促がしたことで、詩衣の篤紀に対する気持ちはどんどん膨れ上がった。

運命だなんて信じていないけれど、詩衣にとって知里のその言葉は満更でもなかった。

小学校の頃から何も変わっていない優しい笑顔だった。

見た目は幾分か大人っぽくなり、男らしさが増したせいか見慣れないものがあつたが、あの笑顔だけは詩衣が好きだったころのままだった。

「知里の積極的な性格のおかげで今日会える約束ができたのだから、今度パスタでも奢らなきゃな」

そんなことを考えながら詩衣は喫茶店までの道のりを足早に歩いていった。

シフォン素材の白いスカートがふわりと揺れた。

視線

ウッド調のその扉を開けると、すでに篤紀の後ろ姿があった。詩衣は髪が乱れていないか手鏡で確認し、さつと薄ピンクのトートバックにしまった。

「待たせちゃったかな？ 篤紀くん早いね！」
言いながら詩衣は篤紀の向かいのソファーに腰を下ろした。

「…西浦！ 生憎、女性は待たせない主義なんだ」
篤紀の瞳がイタズラに光った。
こんな聞いていて小っ恥ずかしくなるような
台詞をさらりと言えるのは、おそらく篤紀くらいだろう。

「今日、意外だった。まさか西浦から連絡くるとは思わなかったからさ」

「…そうかな？」
詩衣は自分の頬が赤く染まっていくのがわかった。
照れ臭くなり必死で次の話題へと会話を移した。
「ここよく知ってたね。私は同期の子に連れられてよくこの辺で遊んでるんだけどさ」

篤紀は一瞬、虚をつかれた。

篤紀にとってこの喫茶店は忘れられるはずのない場所なのだ。

「ああ、大学が池袋だったから…この辺は割と土地勘あるかな」

篤紀がふいに窓の外を眺める。
その視線を追い詩衣も窓からの光景に目をやる。

駄々を捏ねたものわかりの悪い子供の手を引っ張って、歩いている
母親の姿が目に入った。

表情

詩衣にとって、篤紀と話している時間はあつという間だった。

例えて言うとするれば…朝起きて顔を洗う時間くらい。それは本の数分の出来事のように感じた。

その間に二人は数多くのことを話した。浅井先生が結婚したこと、クラス一悪ガキだったタツちゃんが校長先生に怒られ大泣きした時のこと…。

同じ時間を過ごしてきた二人にとって、話題は溢れんばかりにあるのだ。

ふと、一瞬会話が途切れた後、篤紀が思いもよらぬ言葉を発した。

「動物園でも行こうか」

「は…？」

しまった…せめて「え…？」と言うべきだった。それくらいビックリした。驚きの感情が、表情だけでなく声にまで伝染してしまったのだ。

篤紀は一瞬戸惑いの表情を浮かべたが、すぐ様いつものひょうひょうとした口調で話しはじめた。

「お前、はっ…？つて。はは。嫌かな？」

「嫌じゃないよ。嫌な訳ない」

篤紀はまた窓からの景色を眺めた。日が暮れはじめている。きっと今日は満月だ。

「昔さ、クラスで飼ってたウサギ…西浦飼育登板の時いつも楽しそうに餌あげてたよな。」

「嬉しかった。」

次の約束が出来たこと。篤紀から誘ってくれたこと。

しかしそれ以上に、篤紀の思い出の中に確かに自分が存在したことに言葉では言い表せないような感情を抱いた。

そして、自分でも忘れていたような出来事を覚えてくれていたことがたまらなく嬉しかった。

「じゃあ、動物園…次の約束ね！」

その言葉に頷くと、篤紀は髪をかきあげそして優しく微笑んだ。

帰路に着く途中にある歩道橋を登ると、そこからオレンジ色の夕日
が自分を応援してくれているかのように美しい光を放っていた。
詩衣はしばらく夕日を眺めた。

そして踏み出した一歩は、すぐさま影にのみ込まれていった。

奇跡

季節はすっかり移り変わって、朝起きた時の寒さが一層厳しさを増してきた。

青森ではこの季節、当たり前のように雪かきをしている人々が目に付くが、東京ではその様な光景を見ることはあまりない。

代わりに目に入るのは、街にこれでもかと言わんばかりに飾り付けられたクリスマスの装飾だろうか。

詩衣とはほぼ毎週のように会っている。詩衣と会うと嫌なこと全てを忘れられる気がした。

靴したに穴が開いたという小さなことから、過去の辛い失恋まで全てのことを…だ。

それが何故なのか、篤紀なりに考えてみた。

おそらくきっと、篤紀といるときの詩衣が余りにも幸せそうな顔をするからだ。

自分がこんなにも幸せそうな顔をさせてあげてるのだ、と悦えつに浸れる。

そんな感情にどっぷり漬かるのは、それほど悪い気もしない。

12月25日。

今日も篤紀は詩衣と時を過ごしていた。外苑の銀杏並木も今日はすっかり純白が似合うイ

ルミネーションと化していた。

「地元だとき、クリスマスに雪が降るなんて当たり前。むしろ大雪

で外に出ようなんて思わない…それがこっちだとこんなに人がこつた返してるんだもんな。不思議だな」

その言葉を聞いて、詩衣は微笑んだ。手にはこんな日によく似合う真っ赤な手袋がはめられている。

「ほんと、カップルばかりだね」

言い終えた後、詩衣は少しだけ羨ましそうな眼差しを篤紀に向けた。篤紀はその視線にドキっとした。これがクリスマスの魔法だろうか。

詩衣を喜ばせたい。そうすればきっと、自分も幸せになれるんだ。そう思い篤紀は自分の想いを言葉にのせた。

「はたからみれば俺だだってそう見えるだろ…何なら本当にそうなる？」

早く詩衣の反応が知りたい。先走る気持ちを抑えようとそっと息を吐く。濁りもなく真っ白だ。

次の瞬間、詩衣の瞳に溢れそうなほど涙が浮かびあがった。それは詩衣の白い肌をより一層引き立たせた。

篤紀は詩衣の柔らかく細い肩を後ろから抱きしめる。

「泣くな！」

少しはにかみながらそう言い放った時、掌に水滴が滴った。詩衣の涙だろうか、それとも二人を祝福するかのようにタイミングよく粉雪が落ちてきたのだろうか…。

12月25日。

東京でも珍しくホワイトクリスマスとなった。

その日は詩衣の24回目の誕生日だった。

日常

翌日の朝出社すると、休憩室には千里のハイテンションな声が響き渡っていた。

まるで昨日の余韻をぶち壊し現実に戻してくれる様な声だな、と詩衣は思った。

良くも悪くも詩衣は千里のそんなところが好きなのだ。

中にはいると、千里が大きく手を振りながら話しかけてきた。

「うーたーえー！誕生日おめでとう！」

誕生日を忘れずに覚えているところに、やはり千里の人の良さを感じる。

「ありがとう！シフト変わってもらってゴメンね」

「ほんとだよ。こっちはクリスマスだって言うのに7連勤中だよ。で、どうだったの？」

詩衣は答えるかわりに、千里の目を真っ直ぐ見つめた。その目は悪戯にひかり期待に満ち溢れている。

詩衣は手で小さなハートマークをつくった。

「やったあー！」

千里は表現しようがないくらいのテンションで、ガッツポーズをした。

そんな千里の滑稽な姿に詩衣も思わず大声で笑ってしまった。

それから詩衣と篤紀は、いつもどちらかのアパートで仕事が終わった後夕食を食べるのが日常となっていた。

詩衣はシフト制のため土日休みが少なく、一方篤紀は暦通りに休日があるため丸一日一緒にいれる日は意外に少ない。

もつと一緒にいる時間が増えればいいのになあと詩衣が言ったところ

ろ、篤紀が毎日夕食一緒に食べようかと提案してくれた。

この日も詩衣の部屋で少し冷めたカルボナーラを食べていた。

「そういえばさ、うたの誕生日っていつ？」

聞きながら篤紀はビールを飲み干す。まだ底に残っていると思ったのか、缶の中をみてあれ？ といった表情を浮かべた。

いつのまにか、詩衣のことを「うた」と呼ぶようになっていた。

「12月のねー、25日だよ」

詩衣はカルボナーラをフォークに巻きつける。この作業が地味に好きだった。

「それって…」

「そうあの日」

につこりと詩衣は微笑んだ。頬つぺたにはえくぼが浮かんでいる。肩をつくしと落としながら篤紀は喋りだした。

「ごめんな。何もプレゼントあげられなかったな」

詩衣が首を横にぶんぶんと2回程振ると、篤紀は何かを思いついたようだった。

「そうだ！ 来年のうたの誕生日には旅行に行こう。俺、それまでに金貯めるからさ。うたの行きたいところに行こう」

目を見開いて、今度は縦に首を振った。

まだまだ先の約束だけど、今からそれが楽しみで仕方なかった。

そして二人は一緒に眠りに落ちて行った。

素直

「何ていうか：すごくいいこなんだよな」

「いや、その表現陳腐すぎるだろ」

すぐさま健人は篤紀に対し率直な感想を述べた。

彼、佐々木健人ささきけんとは篤紀と同じ高校の出身だ。ついでに言うと大学も同じ、さらには学科まで一緒ときたものだから自然と仲良くなった：というよりならざるをえなかった相手だ。

まあとは言え高校の時は話したことさえなかった。こいつの独特の雰囲気というか軽率さが、野球部に所属していたスポーツ少年の篤紀とはそぐわないところがあつたからだ。

しかし、何の因縁か同じ大学に進学することになり渋谷々会話を試みているうちに、見た目ほど悪い奴でもないかもなという気になってきた。

奇抜な茶髪にやたらと長い襟足も今となってはだいぶ見慣れてきた。そんな健人は、卒業後も篤紀の事を月に一度のペースで呼び出し飲みに誘う。

今日も誘われて、大好物の砂肝をつまみにいただいている時に詩衣のことを聞いてきたのだ。

「陳腐っていうけどさ、ほんとに俺が望む事全てをやってくれるんだ。いい子としか言いようがないだろ」

「ふーん、例えばやらせろって言ったら速攻でやらしてくれるの？」この男はそういうことしか頭にないのだろうか。

だから、いい歳していつまでもフリーターなんだ。無論、健人に言わせるとフリーターではなく夢追い人ゆめおひびとらしい。全く口だけは達者だ。気を取り直し篤紀は言った。

「何でそうなるんだよ。そういうのじゃなくてさ、俺が仕事遅くなつてそれでも味噌汁飲みたいって言ったら本当に作ってくれたりとかさ……」

「なるほどねー」

そう言いながら健人はニタニタとにやけている。その顔はひどく気味が悪い。

「何だよ？」

何か言いたげな健人に対して篤紀は問いただした。

「そのさ、うたちゃん？まるで華^{はな}とは正反対のタイプだと思ってさ」

誠実

「佐々木健人って…ササケンさん？」

詩衣は携帯電話を右手から左手に持ち直した。

「そうそう、高校の時はあだ名はササケンだったな。詩衣、知っているんだ？」

「知ってるってほどではないけど…名前は聞いたことあるかな」

そう答えながら詩衣は思った。実際は知っているなんてもんじゃない。

詩衣の地元の青森で、健人はちょっとした有名人だった。と言ってもいい方で有名なのではない。悪い方だ。

健人は女癖が非常に悪く、彼女をすぐにとつかえひつかえすることでも有名人だったのだ。当時、市内の女子高生の間では「北高のササケンに気をつける」という合言葉ができたほどだ。

事実、詩衣の高校の同窓生にも数人被害者がいた。

そんな噂があるだけに、篤紀と健人が友人だと聞き正直驚いていた。誠実な篤紀のタイプとは合わないような気がしたからだ。

「それでさ、健人がうたに会いたいって言うてたんだよね」

「それなら…わたしは別に構わないよ。篤紀の友達に会えるのは嬉しいしね。」

少々抵抗があったものの、篤紀の友達に自分を紹介してもらえるのは素直に嬉しい。

それに詩衣は、篤紀の友達がどんな人なのかを知りたいと思った。

「ありがとう。うた今度の日曜日非番だったよな？それじゃあ、その日に健人がバイトしてるバーラウンジに連れて行くよ」

「わかった。…おやすみなさい。」
「…おやすみ。」

詩衣は会えない日にする電話も好きだった。いつもよりも少しだけ低く聞こえる篤紀の声や、普段よりもずっと耳元に近いところで囁かれるのが新鮮だからだ。

電話を切った後、詩衣はそんなことを考えていた。ずっと考えていた。

心がホッカイロみたいに温かくなった。

関係

いつのまにか身体が凍てつく季節は通り過ぎ、柔らかい風が優しく頬を撫でる様な季節へと移り変わっていた。

冬に備えた重装備で歩いていると、これが意外と？暑い？。

隣で詩衣が「やっぱりマフラー要らなかったかも」と呟いている。それでも、しっかりと絡ませあった手を解こうとはどちらもしなかった。

健人が働いている、そのバーラウンジは、東武東上線成増駅からは目と鼻の先のところにある。

ちなみに、篤紀の住んでいるマンションからも徒歩5分圏内という、常連になってもおかしくない様な場所にあるのだが、実際のところ行くのは半年ぶりだ。

健人と篤紀は、大学時代同じ場所に住んでいた。と言っても、誤解されたくはない。

同居していたわけでもなければ、居候していたわけでもない。

地方学生の為に斡旋されている、大学の学生寮で暮らしていたのだ。

こうして振り返ると、健人とはつくづく仲良くならざるを得なかった。無論、おそらく健人も同じことを思っているだろう。

今向かっているそのバーラウンジは、健人が大学時代からアルバイトとして働いている店である。

卒業後、健人はお隣の和光市駅付近の物件に引っ越したが、篤紀は成増という場所の便の良さが気に入っていたため、学生寮の近くにマンションを借りたのだ。

そのため、篤紀のマンションと健人のバイト先であるバーラウンジはとても近い場所にある。

その距離を歩くのにそんなに時間はかからなかった。

バーラウンジが入っているテナントビルの1階はちよつとこじやれたイタリア料理店になっていて、よく地方紙の取材が入る地元ではわりと有名な店らしい。

そのビルの地下一階が健人が働いているバーラウンジだ。

1階のイタリア料理店とは対象的に、地下へと続く階段は無機質なコンクリート打ちっぱなしの作りになっていて、全体的に薄暗い。ところどころに灯されている間接照明が雰囲気をつくりあげている。中にはいると、外壁はそのまま無機質なつくりだが、調度品やインテリアが所狭しと置いてあり、特に革張りの真紅のソファーには目を奪われる。

「わりと空いてるからお好きな席にどうぞ」と健人に促され、二人はカウンターの席に座った。

カウンター越しに見える棚にもリキュールから日本酒まで多くの種類の酒類がセンスよく並んでいる。

普段はビールが発砲酒しか飲まない篤紀にとって、飾られている酒類の銘柄は正直よくわからないが、あまりの数の多さについて目を奪われてしまう。

篤紀がビール、詩衣がカンパリオレンジを注文すると、健人は「サ

「ビスするよ」と言い生ハムとモッツアレラチーズで出来た前菜をカウンター越しに2人に差し出してくれた。

正直、詩衣を健人に会わせるのはあまり乗り気ではなかった。

とはいえ、健人の誘いを適当な理由をつけて断ることはそれほど難しいことではない。

しかし、篤紀にその選択肢はなかった。

健人のことだから、今回断ったとしても、詩衣に会わせるまでしつこく誘ってくるのは目に見えているし、

それより何より…

篤紀は健人に対して後ろめたさというか負い目があった。

過去

店内には篤紀と詩衣の他には、もう一組カップルがいるだけだった。「日曜日とはいえ休日なのに、随分閑散としてるんだな」と篤紀が尋ねたところ、

「まあね、最近この辺り、似たようなバーが増えてきてんだよ。お陰様でこっちは平和よ。」と、健人はさらりと答えた。

そのカップルは、まだ7時前だというのに肩に手を回しあいまるでこの世に二人しか存在していないかのような雰囲気を作り上げている。

さすがの健人もその客相手にはいささかやりづらい様で、苦笑いをしている。

接客する必要はないと感じたのか、健人は再び詩衣と篤紀が座っているカウンターの方に引き返し、詩衣に対して通り一遍の挨拶を始めた。

詩衣と健人は、篤紀の予想に反して意外と直ぐに打ち解けたようで昨夜放送されたドラマなんかの話を始めた。

人間関係における相性とはよくわからないものだ。まったく正反対のタイプの二人が友人だったりするのは、普通によくある話である。

篤紀はそんな詩衣と健人の様子を横目で眺めながら、ふとある事を思った。

以前にもこんな光景があつた様な気がした。しかし、隣にいたのは詩衣ではない。

隣にいたのは…、いや、やめておこう。

一瞬自分の左脳をよぎったあの光景を篤紀は必死に思い出すまいとした。

…華^{はな}のことは、もう思い出したくないんだ。
思い出したくなんかないのに…
忘れたくもないのはどうしてなんだろう。

そんな自分の内心をまるで見透かしていたかのように、詩衣が声をかけてきた。

「……のり！篤紀！」

急に現実に戻され、今ひとつ頭の回転が回っていない篤紀に対し、詩衣は優しく微笑んでそして続けた。

「さつきからずっと携帯鳴ってるよ？」

そのつめたい電子音を聞き、やっとのことで篤紀は我にかえた。

その音はまるで、自分の内心に警鐘を鳴らすような音だった。

「ん？ああ…うた、ありがとう」

そう一言詩衣に告げると、篤紀は一度店内を出て、その電話を受けとった。

電話の相手は会社の上司だった。

何でも、今日配送した医療器具に不具合が生じたため、直ぐに会社に来て欲しいとのことだった。

全く、普段は休日出勤なんて滅多にないのに、こういう日に限って呼びつけてくるんだよな。溜まったもんじゃない。

半ばふて腐れながら篤紀はそう思ったものの、直ぐに詩衣のもとに戻り事態を説明した。

「うた、俺の家まで一人で帰れるな？」

詩衣と一緒に店を出ようか迷ったものの、着いてからまだ一時間も経過していなかったため、流石に自分の都合で急かすのも申し訳なく思い、その様に尋ねた。

「うん、大丈夫だよ。これ一杯飲んだら帰るね。」

のんびり屋の詩衣から予想通りの返事をもらうと、篤紀は店を後にした。

健人が詩衣に対して、何か余計なことを言わないか少々心配ではあったが、まあ大丈夫だろう。

詩衣に手を出したりしないかも、一瞬頭をよぎったが、直ぐにその心配は皆無だと気づいた。

健人は友達の彼女には手を出さないことを美德としていて、本人もそう豪語している。

最も、ナンパした相手がたまたま友達の彼女だったことは数回あったそうだが。

篤紀も健人のそこだけは信用していた。こんなことを言うと、健人には怒られそうだが。

そう、健人は友達の彼女を奪う様なやつではない。

むしろ…

むしろ、そんなことをしたのは他ならぬ自分なのだから…。

哀愁

スマートな挨拶、嫌味のない接客スマイル、完璧なまでのシェーカ―をふる仕草…

この短時間の間でも、何故健人が女性にモテるのが詩衣にはわかったような気がした。

そんな詩衣の内心など露知らず、健人は屈託のない笑顔で話しかけてきた。

「どう？美味しいでしょ。当店自慢の一品」

そう言って、健人はさきほど詩衣が注文したカルボナーラを指差した。

料理が趣味な詩衣にとって、大好物のカルボナーラはそこそ腕前に自信があつたが、このカルボナーラには完敗だ。

「うん！すごく美味しい」

詩衣のその返答に、今度は少年が母親に褒められた時の様な笑顔を浮かべた。

今日、詩衣が健人に会う事を即答した一番の理由は、過去の篤紀を知りたいと思ったからだ。

小学校の頃こそ、同じクラスだったためある程度は覚えているが、卒業してからのことは本人が何かのついでに喋る程度にしか聞いたことがない。

無論、ただの好奇心ではあるのだが、篤紀に対する愛情が日増しに

強くなつていくにつれ、昔の篤紀を知りたい気持ちも比例して強くなつていった。

「健人さんつて、高校と大学が篤紀と一緒にだつたんだよね？」
健人は軽く頷いた。

「昔の篤紀つてどんな感じだつたの？」

詩衣からその質問がでるのは半ば健人も予想していたのだろう。
組んでいた腕を解いてから割と流暢に話し始めた。

「うーん、高校の時はあまり親しくなかったから、あまり印象にな
いんだよね。…敷いて言えば、根っからの野球少年だったことくら
い」

言い終えてから、何か思い出したのか、付け足した。

「そういえば、甲子園！県予選の準決勝であいつサヨナラホームラ
ン打つてたな。結局、決勝では負けたんだけど。」
話を聞きながら、詩衣はその光景を頭に描いていた。

「それじゃあ、大学時代は？篤紀の話だと野球は辞めたつて聞いた
けど。」

健人は同調しながら答えた。

「そうそう。野球はきっぱり辞めたな。まあ華に夢中だったしな！
…あっ…」

迂闊な事を口にしてしまったと健人は思ったのだろう。一瞬動きが
止まった。

健人が軽率だと言われる所以はこの辺りにある。

実際、彼女の前で別の女の名前を口にし激怒された回数は、両手両足の指では足りない位の数である。
とはいえ、健人も馬鹿ではないので、それからは名前を呼ぶ時は「おまえ」と呼ぶように癖づけている。

「…はなつて？」

恐る恐る詩衣が聞いてきた。聞き逃してくれていることを願った健人だが、神はそんなには甘くない。

嘘をついても詩衣には通じないだろうと悟った健人は、一息ついて話し始めた。

「大学の時付き合ってたんだよ、篤紀。元カノ」

過去に付き合った人の数人いてもおかしくはないことを頭では理解していたが、詩衣の胸の奥がチクリと痛んだ。…そんな気がした。

「そうだったんだ。…どんな人？」

そこまで詩衣が追求してくるとは、予想だにしていなかったんだろう。

健人はどの様に答えればいいのか迷ったものの、直ぐにベストアンサーが思いつくはずもなく、結局自分の率直な感想を述べることにした。

「うたちゃんとは、正反対のタイプかな。」

詩衣は、自分がどんなタイプなのか自分自身理解しているわけではないため、健人の応えが今一ピンとせず、首を横に軽く倒した。

そんな詩衣の様子を見て、健人はつけたした。

「うーんと、なんて言うか…人を散々振り回すタイプかな。悪気は

なく天然でなんだけど。篤紀にはそれがあつてたのか、2年くらい続いてたな。まあ、俺は直ぐにアウトだったけど」

俺は？

今度は健人の答えたがよくわからなかったのではなく、言っていること自体詩衣には理解できなかった。

「…俺はって？」

詩衣は真っ直ぐに健人を見つめた。その眼差しにはいささか鬼気迫るものを感じる。

今度は健人はなんて事もないような感じで話し始めた。

「篤紀と付き合う前、俺も華と付き合ってたんだよ。」
その健人の表情はどこか哀愁漂うものがあつた。

詩衣は必死に思考を働かせ、そして詩衣の頭をよぎった一番最悪のパターンではないことを願い、声が震えるのを健人に悟られない様に問いかけた。

「…健人さんも付き合ってたってどういうこと？………篤紀が奪ったの？」

真実

「詳しく…教えてもらってもいいかな？」

詩衣は覚悟を決めて、健人に言った。

この世には知らない方が幸せなことも多々ある。恐らく、今詩衣が健人に聞こうとしていることも、その類に入るだろう。

そんなことは詩衣も重々理解していた。

聞いてしまうことで、二人の關係に亀裂が入る…なんてことはないと思うが、少なくとも詩衣は今までと同じ目で篤紀を見ることは出来なくなるだろう。

そして、これからは「はな」という女性の存在を少なからず意識して過ごすことになるだろう。

…それでも詩衣は知りたかった。過去に、篤紀と健人、そして「はな」の間に何があったのかを。

無性に知りたかった。

それがどうしてなのかは自分でもわからなかった。

「…奪ったっていうほどではないよ」

次の瞬間、詩衣の覚悟をぶち壊すかの様な軽い口調でそう呟いた。詩衣は思わず肩の力が身体中から抜けていくのが自分でもわかった。このまま軟体動物にでもなってしまうのだろうか、というくらいに勢いで急速に身体が無重力状態に陥った。

自分の想像がいささか行き過ぎであつたのだろうか。

ともあれ、自分の恋人が過去に友人の恋人を奪つた訳ではないと解り少しだけ安心した。

健人は静かに、続きを話し始めた。

「うん。奪つたっていうほどではないんだ。

ええと…俺と華は大学1年の夏頃、サークルが一緒に。まあ、なんて言うか俺が口説いて付き合い始めたんだ。」

言いながら、詩衣を横目でみた。

詩衣は軽く頷き、続きを促した。

「それで1ヶ月もしない内に、華への気持ちは薄らいでいったんだけど、それからしばらくして華から篤紀と付き合つて聞かされたんだ。」

詩衣は掌に汗が滲んでるのを感じた。

結局、それって篤紀が奪つたに違いないのでは…と思わず口にしてしまいそうになったが、健人が続きを話し始めたので、黙って聞くことにした。

「俺、こんなんだから華と付き合つてる間も数回浮気してたし…そのことを華は篤紀に相談してたみたいで。ほだされちゃったんだろうな。篤紀はそんな華をほっとけなかったみたいだ。まあ、俺としては華が手におえないと思つてた頃だったから別によかつたんだけど。…とは言え、一言くらい言つて欲しかったかな。」

言い終わると健人はスッキリしたのか、満塁ホームランを決めた時の少年の様な清々しい笑顔を詩衣にふりまいた。

「…辛くなかったの？」
詩衣は思わず口にした。

「まあ、華のことはどうでもよかったんだけどさ。篤紀が何も言ってくれなかったのは少し寂しかったかな。…同じ高校から、同じ大学に進学して、しかも学科まで一緒だったから俺的にちょっと感じるものがあつたんだ。運命…なんて言ったら寒いけど。」

自分の台詞を振り払うかの様に、健人は続けた。

「とはいえ！篤紀も言うタイミング逃したただけだろうし。少し気まぐずい時期もあつたけど、その後は3人結構仲良くやってたかな。だから別に、篤紀が奪つたっていうほどではないんだ。そもそも、浮気性の俺が悪いわけだし。」

健人は自虐的な笑みをうかべた。

健人の話を詩衣なりに理解した。結局、篤紀が奪つた訳だが、本人がそれを否定しているのも、もうそこには触れないことにした。そして、詩衣にはどうしてももう一つだけ知りたいことがあつた。

「どうして二人は別れたの？」

健人は少し眉を潜めたものの、詩衣の瞳を真っ直ぐ見つめ、そして喋った。

「簡単な話だよ。…今度は華が浮気したんだ。つまり篤紀が奪われたんだ。」

鼓動

二車線に広がる国道に面しているマンションの4階を、歩道橋から眺めた。

405号室の灯りはまだ灯されてはいなかった。

篤紀は、仕事場から自宅まで駆け足できたその足を、休める間もなく今度は健人のバーラウンジまで走らせた。

店内を見渡してみると、ついさきほどまで詩衣がかけていたイスにその姿はなかった。

「お疲れさん。仕事大丈夫だったか？」

篤紀の姿に気づいた健人が、洗い終えたばかりのグラスを拭きながら、駆け寄りそう問いかけた。

「詩衣は？」

「ん？ああ…つい10分くらい前に出ていったよ」

しまった。行き違いか。

健人の言葉に、全速力で駆けてきたせいも、今まで蓄積してきた疲労が篤紀の身体を一気に襲いかかった。

「わかった。サンキュ」

健人に告げ、引き換えそうとしたとき「ちょっとまった。」と、健人が呼び止めるので、早く帰りたい衝動を抑え、振り返った。

「…そのさ、華のこと話したけど、問題ないよな？」

「あほか！…言いわけないだろ！」

思わず自分の耳を疑いたくなる様な言葉に、なんとも間抜けな返答をしてしまった、…と頭の中はやけに冷静に分析している。

やっぱりそうだよな、と罰が悪そうにしている健人を尻目に篤紀は聞いた。聞いた。

「…話したって何を？」

その篤紀の若干尖った口調に、開き直ったであろう健人はおちゃらけた表情で喋りはじめた。

その様子が篤紀の苛立ちを一段と加速させた。

「だからさ、俺が華と付き合ってたんだけど、しばらくしてお前が付き合いはじめて、その後、華は浮気してしまい、二人はジ？エンド…って感じでかな。」

それを聞き、篤紀は思わず怒鳴り散らしたい衝動にかられたが、幾分か篤紀の中に残っていた理性の方がそれを上回ったのだろう。出来るだけ穏やかな口調で話すように心がけたが、実際のところできていたかどうかはわからない。

「…何でそんなこと話したんだよ？」

一転して、今度は真面目な表情でその問いに答えた。

「まあ、華のことすっかり口滑らせたのは俺だし、そこは謝るけどさ…。その後、お前と華の関係を根掘りは掘り聞いてきたのはむしろむこうだぜ？」

その勢いを落とすこともなく健人は続けて話した。

「実際、もう過去のことだし時効だろ？今、華と付き合ってるって言っんなら問題だろうけど、昔の話だしさ。それに華はもう…」

そのときの篤紀にはもう冷静さや、理性なんて物は微塵も残っていなかった。握りしめた拳の間に冷や汗が湧き出ているのを感じた。

「…黙れ。」

恐らく、その時に篤紀が発した一言は健人が今まで聞いてきたどんな篤紀の言葉より迫力があつたのだらう。思わずたじろみ、後ろかがみになっている健人の姿がそこにあつた。

華はもう…その後に健人が何を続けて言おうとしたのかは分かっている。

ただそれを聞きたくなかった。

聞くのが怖かった。

何故なら、未だに認められないのだから。

詩衣のことはもう、頭の片隅にもなかった。華のことで頭の中は渋滞をおこしていた。

華はもう、結婚して子供がいるんだから。

乱雑

3月といえば引越しシーズンだ。

大学進学を機に一人暮らしを始めるもの、会社から移動を命じられ見知らぬ街へ転勤するものなど、非常に多くの日本人が4月から始まる新生活に備え、行動を開始する。

この時期に引越しするのは失敗だったかな、
まっただはな
と松田華は思った。

事実、引越し業者を探すのにも手こずり、来週の引越し予定日まで、さして時間もないのに、荷造りが進んでいない。荷造りが進まないもう一つの理由が、子供だ。

1歳になったばかりの、遊びたいざかりの子供にとっては、山積みになったダンボール箱さえ宝の山だ。

「これは思わぬ誤算だったな。」
華は思わずそう独り言を漏らしたものの、その心は浮き足立っていた。

「そろそろマイホーム、購入しようか。」
旦那の圭けいがそう提案してきたのは、半年前のことだった。

1LDKのマンションに家族3人で暮らしていたものの、子供の成長に伴いすこし手狭になっていた。

幸い、圭が立ち上げたベンチャービジネスの業績も右肩上がり。すぐに華はその案に同意し、隣の市で販売していた建売住宅を購入した。

大量に陳列されている、書籍の多さに頂垂れながらも、華は手を休めることなく荷造りを進めた。

しかし、書籍スペースには数多くの誘惑物が眠っている。華はつつい、昔読んだ小説や、卒業アルバムに手を延ばしては、中を確認してしまう。

そういえば、小さい頃も母親に部屋掃除をする様に言われても、結局はかどらなくてよく叱られてたよな。今この場には母親はいないわけだし、どうせなら好きなだけ本を読み更けよう。

と、華は決意し、一番右奥にあった、直木賞作家の処女作を手に取り、ページをめくった時、一枚の写真が膝の上に落ちた。

なんだろう？と華は思い、その写真を拾い上げ、大きな目を更に見開いて写真を眺めた。

そこに写っていたのは、華と篤紀だった。

懐かしいな。

華がその様な感情を抱いたのは、隣に写っている篤紀に対してではなく、その写真が撮影された場所に対してであった。

久しぶりにマスターが入れてくれるキリマンジャロが飲みたくなり、華は時計に目を向けた。

百貨店で購入した銀縁が雰囲気を醸し出している、その時計の針は2時をさしている。

ここから電車で50分。今から行っても夕食には間に合うな。華はそう思い、すぐさま出掛ける支度をはじめた。

家を出ようとした時、先ほどの写真がまだポケットに入ってるのを感じ出し、取り出すと乱雑に丸めてゴミ箱へと放り投げた。

そして華は、喫茶『砂時計』へと向かった。

心情

「それで？結局、篤紀くんにその…はなつて人のことは何も聞かなかったの？」

千里が角砂糖をウエッジウッドのティーカップに落としながら、そう尋ねてきた。

詩衣はアール 그레이を一口すすり、その問いに答えた。

「だって…悪いことしてる訳じゃないんだしさ。それに、なんて聞いていいかわからなくて…」

千里と職場以外で会うのは久しぶりだ。

二人は午前中、シヨッピングをし、疲れたので喫茶『砂時計』で休憩をしていた。

千里が、さきほどの角砂糖をティースプーンでグルグルとかき混ぜる。

かき混ぜ過ぎなのでは？…と詩衣は思ったが、千里の質問攻めは詩衣に突っ込む隙を与えない。

「そりゃ、悪いことしてる訳じゃないけどさ。彼氏の友達にそんな話聞かされたら気にならない？私なら本人に詳しく説明してもらっけどなあ…」

千里のティースプーンをかき混ぜるスピードが一段と速度を増している。

「まあ、ねえ…。」

詩衣はそんな千里の手に、半ば目が離せなくなり、何となく煮え切らない返事を返した。

煮え切らない。

それはまさしく、今の詩衣の心情そのものだろう。

あの日、あの健人のバーラウンジに行った日。健人から篤紀の過去についての話を聞いた後、詩衣は何となく真っ直ぐ篤紀の部屋に帰る気になれず、コンビニに寄った。

お気に入りの雑誌の最新号を立ち読みしていたら、ついつい熱中してしまい、時計を見たら12時を回っていたので、急いで篤紀の部屋に帰った。

既に帰っていた篤紀は、ビールを飲みながら録画しておいた映画をみているところだった。

詩衣に何か言いたそうではあったが、結局その日はお互いほとんど会話もなくすぐ眠りについた。

次の日からは今までとお互い何ら変わりもなく過ごしている。

あの日から早、一週間が過ぎていた。

そんな煮え切らない気持ちを払拭しようと、詩衣は話題を変えた。

「そういえば千里昨日休みだったよね？ミーティングで決まったんだけど、今度からうちの店舗、新聞とるらしいよ？」

突然の話題に頭がついていかないのだろう。

千里のティースプーンを動かすてはようやく固まり、ポカンと口を

開けながら詩衣を眺めている。

詩衣は笑顔で付け足した。

「それでね、今度から毎月一人頭200円徴収だって」

ようやく頭が回転したのだろう。

千里は、頭からまるで湯気が上がっているかのように興奮している。

「なんで新聞？！ていうか経費じゃないの？？」

詩衣は千里と対象的にサラリと答えた。

「さあね。店長の気まぐれ。」

「まあ…ツイてない。こうなったらヤケ買いしてやる。詩衣付き合
ってよね。」

言い終えると、千里は一気に紅茶を飲みほし、薄手のコートを手にとった。

詩衣も慌てて身支度をし、髪の毛を簡単に整えた。

二人が店を後にしようとした時、後方から子

連れの女の人呼びかけてくる声が聞こえてきた。

二人が振り返ると、その女性は笑顔で二人に話しかけた。

「あの…忘れてますよ？」

その女性の白くて綺麗な手の中には、詩衣の携帯電話があった。その携帯には篤紀から貰ったデイベアのストラップがついている。

直ぐ様自分のだと確信した詩衣は、女性から携帯を受け取り、お礼を言った。

女性は優しく微笑み、自分がいた席へと戻って行った。

詩衣と千里は、砂時計を後にし、再び人混みの中へと紛れて行った。

思惑

詩衣が千里と買い物をしていたその日、篤紀は健人と飲みに出ていた。

何でも、健人のバーラウンジの店の近くに競合店がまた出来たらしく、偵察がてら付き合っただけと言われ、付き添うことにした。

つい一週間前、健人のせいで詩衣と面倒なことになってしまったのに、何事もなかったかのように誘ってくるあたりに、図太さを感じずにはられない。

まあ、その誘いを断れない自分も何とも情けないが。

「それで結局、うたちゃんに華のこと何も言っていない訳？」
どの口がそんなこと言えるんだ…と思いつつも、いつもの淡々とした口調で健人の問いに答えた。

「まあ、うたも何も聞いてこないし。」

疲れが溜まっているせいだろうか。今日はビールがやけに苦い。

「そりゃ、向こうから根掘り葉掘り聞けないだろう。お前が一言、華とのことは終わったことで、今はお前が一番なんだ…みたいなこと言えば、その気まずい雰囲気もすぐ元通りになるだろ。」

だから、気まずい雰囲気になってるのは誰のせいだよ…と、健人に言っただけだが、健人の言ってることも悔しいがあながち間違いない。

詩衣はきつと待っている。

俺の口から、ちゃんと過去のことを話し、その上で今は華ではなくうたのことが好きなんだ、と言ってもらえることを。

実際、この一週間の間で、何度か詩衣に伝えようとした。

でもどうしても言えなかった。

それが何でかはわからないが。

「いつそのこと、結婚しちまえば？」

健人が唐突に放ったその言葉に、危うくビールを噴き出しそうになる。

「何言ってるんだよ、いきなり！」

動揺を隠せず、あたふたしている篤紀に対し、健人が諭すような口調で続けた。

「だってさ、心のどこかに華を忘れられない自分がいるから、胸はってうたが好きって言えないんじゃないの？ だったらいつそのこと結婚して身を固めて、お前の中から華を追い出してしまえよ。」

と、健人はいつになく真面目な表情で言った。

確かにそうなのかもしれない。

うたと結婚して、もっと頭の中をうたのことではっぱいにしてしまえば、今回みたいな些細なことで詩衣との仲がこじれる事もないのかもしれない。

しかし、結婚となると金の問題も出てくる。直ぐ様、現実の壁が立ちはだかった。

「いやいや、まだ無理だし。」

篤紀が答えると、急に健人がニタリと笑いはじめた。

「ふーん、でもお前あれだぞ？俺、うたちゃん結構好みのタイプだから。」

全く、この男の思考回路にはついていけない。

篤紀は、露骨に嫌そうな表情を取り繕い、しゃべった。

「友達の女はとらない主義じゃないのかよ？」

「基本はね。でもお前相手には違うだろ？華のことがあるんだし。」

それを聞いて篤紀の胸の奥はチクリと痛んだ。何だ、健人は全く気にしていないように見えてたが、多少は気にしてたのか。

「だからさ！」

急に今度は少々荒い口調で健人は言う。

「そんなことに何ないためにも、結婚すればいいんじゃないかと思うんだよ…俺は。」

健人が余りにも結婚を勧めてくるので、流石の篤紀も少しばかり意識した。

と、いうのは建前で本当は健人につたをとられることを想像するとたまらなく嫌だった。

自分は華をとったくせに。

「わかったよ。…前向きに検討してみるよ、結婚。」

その返事をきくと、健人は白い歯を見せるように笑った。

「応援するよ。」

そう一言だけいい、健人は残ってたビールを飲みほした。

波乱

季節は移り変わり、日差しが頬を照りつける季節となっていた。

クールビズが推奨され、サラリーマンたちが上着を羽織る機会は、以前と比べ、愕然と少なくなった。

と、いう訳でスーツが売れない。

詩衣の店は閑散期をむかえていた。

「こうなってくると、新聞とりはじめたの有難いね。することないもん。」

最初は文句を言っていた千里も、流石に暇には勝てないのか、休憩室で新聞を読みふけている。

その意見には、詩衣も同調した。

「本当暇だね。でも、新聞読むようになってから、結構客との会話に困らなくなったかも。接客トークだけじゃなくて、時事ネタも話せるって案外大切かも。」

千里は新聞の中から、今日の主なニュースを声に出して読みはじめた。

「どれどれ、今日は…おっ！コジロー昨日の試合で本塁打…あら！オリンピックが経営破綻…」

愉快に話す千里を見つめながら、詩衣は篤紀のことを考えていた。

一時期、「はな」という女性のこと、篤紀と気まづくなってしまうが、時間がたつにつれ、自然と元通りの関係に戻っていった。

やはり時間は偉大だ。

むしろ最近はお互い結婚を意識するようになり、将来のことを話したりもしている。

篤紀の未来予想図に、自分も加わっていることがたまらなく嬉しかった。

それもこれも、いつも詩衣の話を聞いてくれる千里のお陰だ。

そんなことを考えながら、何となく千里を見つめてた。

「ちょっと！聞いてるの！」

ぼんやりとしている詩衣に痺れをきらした千里が呆れたように言ってきた。

「ごめん。千里のお陰で篤紀とうまくいって、仕事にも集中できるし有難いなあって。」

突然の褒め言葉に、千里は頬を赤らめた。
「もお何言ってるの！そお仕事よ仕事！」

二人は休憩を切り上げ、仕事へと戻っていった。

何もかも上手くいった。

この数時間後、篤紀の携帯に一本の電話がかかってきた。

下弦

その日はやけに月が綺麗な夜だった。

と言っても、満月ではない。

空にはくつきりとした下弦の月が、人々を照らしていた。

詩衣は篤紀と一緒に、ホラー映画を鑑賞していた。

首のもげた女の生き霊が、昔の恋人の前に姿を現す話だった。

正直、詩衣はホラー映画は苦手だが、篤紀の趣味に付き合い、鑑賞する日がこのごろ続いている。

最初のうちは、目を逸らしていた詩衣も、今では怖いながらも食い入るように見てしまうようになった。

3時間に及ぶ鑑賞を終え、二人の間に沈黙ができた瞬間、篤紀の携帯電話が鳴った。

その音は、今見たホラー映画が現実の世界のものである合図のような、冷たい音だった。

次の瞬間、詩衣の目に飛び込んで来たものは、篤紀の携帯電話のディスプレイに表示された「松田華」の文字だった。

「出なくていいの？」

詩衣は不思議と無感情だった。

篤紀は「あつ、…ああ」といい、静かに電源を切った。

その様子は明らかに慌てふためいていた。

仕事関係の人や、友達など、篤紀の携帯に、

女から電話がかかってくることは少なくない。

そんな時、いつもは詩衣と一緒にいるときでもお構いなしに篤紀は電話を受けていた。

けれど、今回は違った。

それと同時に、脳裏に張り付いてはがれない「松田華」の文字が詩衣の緊張感を加速させた。

ディスプレイの「松田華」は、篤紀と健人が昔付き合ってた「はな」という女性に違いないと詩衣は確信した。

この、わずか数秒間に、詩衣の左脳はめまぐるしい勢いで、いろんなことを考えていた。

どうして、今頃になって「はな」から電話がくるのだろうか…。二人はとうの昔に終わっているのではないのだろうか…。もしかして、今でも繋がっているのだろうか…。

こういう時に限って、何故か頭が働いた。とても冷静に。

しかし、篤紀に対し何と言って良いのかは全く思いつかなかった。

そんな、詩衣の考えを全て見透かしていたかのように、篤紀は詩衣を抱きしめた。

「…何でもないから。」

そう一言、詩衣に告げると詩衣の返答を聞く間もなく、篤紀は詩衣に強引に口づけを交わした。

それはいつもより、少しだけ長く、そして暖かった。

そして二人は、お互い求めるように身体を重ね合わせ、眠りについた。

序章

昨日の夜は眠れなかった。

いや、詩衣と共に布団に潜り、瞳を閉じてはいたが、睡眠には至らなかった。

恐らく、それは詩衣もだ。

昨夜、ホラー映画を鑑賞した後、突如きた華からの電話。

受けることなく、切ったものの、その後も数回篤紀の携帯に電話がかかってきた。

無論、華から。

当然のことながら、篤紀には何故今頃になって華から電話がくるのか心当たりは全くといっていいほどなかった。

それどころか、別れを告げたのは華からなのに、平気で電話をかけてくる華に対して苛立ちさえ感じた。

詩衣は、電話の相手が華であることに気づいていただろう。間違いない。

おかげで、篤紀と詩衣の間に亀裂が入る可能性さえあるのだから、篤紀が苛立つのも当然といえば、当然だ。

が、それと同時に篤紀の心には別の感情があった。

…華が自分のことを忘れていなかったことに少なからず喜びを感じていた。

その日、篤紀は仕事を定時で終わると、自宅へと直行で帰宅した。スーツから、上下ブラックのスエットに着替え、ワックスがこびりついた頭を無造作にかきあげると、「ふうっ」と大袈裟なくらい大きく息を吐いた。

そして、誰もいない部屋で気分を落ち着かせると、机の前にある携帯電話を手にとり、電話をかけた。

「…もしもし。」

5コール目で出た、久しぶりに聞いたその声は、どこか細く、弱っているように感じた。

「あのさ、昨日の電話何？別れを告げたのはお前じゃん？いきなりあーいうことされると迷惑。」

篤紀の電話の相手は、華だった。
わざと、冷たい口調で話した。
自分が冷静でいられるように。

「…ごめん。」

その声はやはりどこか弱々しく、華特有の覇気が全く感じられなかった。

「別にいいけど…。どうしたの？何かあった？」
たまらず、篤紀は自分の内心を口にした。

しばし沈黙の後、華は話しはじめた。

その声は、どこか震えているように感じた。

「…旦那の、…圭の会社が倒産しちゃった。」

道程

「倒産…？」

華が言ったその単語を篤紀は鸚鵡返しした。ただし語尾は上がり調子だ。

よく耳にする単語ではあるが、今ひとつ実感がわかない。

それを元カノが口に行っているのだから、殊更だ。

「オリンカップル社って聞いたことない？数日前からニュース番組で度々報道されてる…。」

「ああ、知っている。…もしかして、お前の旦那が経営している会社か、その？」

「…うん。」

華の声は相変わらず、活気のないものだった。

華の旦那である、圭と篤紀は面識がある。とは言え、頻繁に顔を合わせていた訳ではない。

大学1年の時、華と健人が所属していたサー

クルに篤紀が数回、二人に付き合わされ、連れていかれたことがある。

名ばかりのスノーボードサークルで、それでも冬の間は、長野の雪山に行ったりもするが、夏の活動がない期間はほぼ毎週飲み会をし、馬鹿騒ぎするだけのサークルだ。

圭は、3人より2学年上のそのサークルの部長だった。

こういう経緯で、篤紀は圭と挨拶を交わすくらいの関係ではあったものの、華や健人に比べると特に親しくはなかった。

だからこそ、華と圭が浮気していると知った時には、ぶつけようのない悔しさがあつた。

その圭の会社が、経営破綻したとき、篤紀は内心では「ざまあみろ」と思った。

勿論、あくまで内心でだが。

「それで、圭が…、人が変わったみたいにお酒ばかり飲んで…。暴れてて、手が付けられない…。」

これ以上関わってはいけない気がした。

篤紀の本能がそう警鐘を鳴らしている。

しかし、篤紀はこんな状態の華を放っておけるほど、無情ではなかった。

良くも悪くも、それが篤紀だ。

「…お前、今どこにいるの？お前の旦那が、子供にまで暴力ふるったら危険だから早く避難しろ。」

篤紀は、最もなことを華に告げた。

「昨日…、何回か殴られて…、今日の朝私の実家に子供と2人で来たの…。今は母が子供見ててくれて、私は斜め向かいの公園…。」
いつもは、ハキハキと喋る華からは想像もできないほどの、静かな口調だった。

旦那の側に、二人がいないことがわかり、篤紀は幾分かホッとした。

「…篤紀…」

「どうした？」

華が自分の名前を呼んでくれるのは、久しぶりにだった。

こんな時なのに、そんなことに嬉しさを感じずにはいらなかった。

「…助けて。」

この一言で、篤紀の頭の片隅にあった詩衣のことは完全に吹き飛んでしまった。

「今すぐ行く。…華、そこで待ってろ」

篤紀が華の名を口にするのも随分と久しぶりにだった。

昔は毎日のように口に使っていたそのフレーズを、呼ぶことがなくなつてから、しばらくは寂しさを紛らわすので必死だった。

今、再びそのフレーズを口に出したことに、篤紀は確かに喜びを感じていた。

華の実家は東京の郊外にある。

付き合っていた頃、華を家まで送るとき、よくその公園で二人は話をした。

何回も口づけを交わした。

その場所へと、篤紀は急いだ。

錯覚

篤紀はギョツとした。

随分と大袈裟な表現に感じるかもしれないが、篤紀の目の前にいる華はそれほどまでに頬はこけ、身体も一回り以上小さくなり、生気が感じられない。

篤紀が知っている華とは、かけ離れていた　　佇まいを除いては。

直ぐに行くと華に告げ、猛ダッシュで電車を乗り継いだ篤紀は、華の実家の斜め向かいの公園に到着し、くたびれたベンチに腰を下ろしている華を確認した。

華も篤紀に気づいたらしく、胸の辺りで小さく手招きをし、無理矢理に笑顔を作った。

篤紀はその手招きにつられる様に足を進め、無言で華の隣に一人分のスペースを空け、腰を下ろした。

最初に言葉を発したのは篤紀だった。

「大丈夫か？」

華は首を縦にゆっくりと振った。

二人の間には何とも重苦しい雰囲気の流れている。

最も、二人が別れた経緯を考えれば当然なのかもしれないが。

「ごめんね。」

今度は華が沈黙を破った。

その言葉が何に対する謝罪なのか、篤紀はわからなかったが、それ以上に華が今何を考えているのかは無性に知りたかった。

「…お前、今後どうするの？旦那とは話し合っていないのか？」

「…わからない。」

「でも、子供のこともあるし、ずっとこのままって訳にもいかない
だろ。」

華は「うん」と殆ど聞こえないくらいの声量で呟いた。

と、思ったら今度は急に声を振り絞って話し出した。

「…大学するとき」

「え？」

「大学するとき、私、篤紀に酷いことしたね…。それで今、圭とこんなことになって…自業自得だね。」

華は自虐的な笑みを浮かべたものの、先程よりかは幾分かスッキリとしたようだった。

「今後のことは…今は考えられない。でも、圭とは…もう一緒にはいられないと思う。」

「そっか…。」

篤紀は先程自分が華に対してした質問であるにも関わらず、何と答えていいのか分からなく返答を詰まらせた。

こうして、華の隣に身を置いていると、華と付き合っていた頃にタイムスリップした様な錯覚を感じた。

まだ9月だというのに、一瞬冷んやりとした風が二人の頬をなぐった。

それにより、篤紀はあの頃とは違うという現実を突きつけられた気がした。

その証拠に、詩衣の顔が脳裏に浮かんた。

「…あの頃に戻りたい。」

華がボソツと呟いた。

篤紀は、聞こえていないふりをした。

華が、今自分が置かれている現実から目をそむけているだけだということを分かっていたからだ。

「大丈夫だよ。」

その言葉は、華が落ち込んでいた時によく篤紀が口にしていた言葉だった。

華もそれを思い出したのか、篤紀の目をみて微笑んだ。

そして、ゆっくりと立ち上がり一歩前に進み振り返った。

「子供が待っているから、そろそろ行くね。今日はありがと。篤紀と話してたら、安心した。…また会ってもらえないかな？話聞い
てくれるだけでいいの。」

篤紀は迷った。

華と再び会うことを。

しかし、結局篤紀の答えは決まっていた。

「ああ、いつでも話し聞くよ。」

付き合ってたところには戻れないことも、詩衣を傷つけることもわかつてい
るのに、どうしてもだろうか自分でもわからなかった。

ただ、華の後ろ姿を眺めてた。

その姿は、やっぱり愛しくてやっぱり切なかった。

願望

「…篤紀、何か隠し事してるでしょ。」

詩衣が放ったこの台詞に特に深い意味合いはなかった。

大手お菓子メーカー「マリコ」が、秋の新商品として発表したチョコレート菓子（余談だが、そのお菓子のキャッチフレーズは、貴方と彼を繋ぐ濃厚なKissである。…冬でもないのに。）を、甘い物に目の無い詩衣は、それを大人買いし、冷蔵庫に保存してある。

ココア、キャラメル、野イチゴ、ビター、そ

して何故かスイカ味という季節感を全く無視した5種類が発売されたのだが、詩衣はそれぞれ10個ずつ計50個を近所のスーパーでまとめて買った。

毎日、1パックずつ夕食後に食べていたのだが、どうも数が合わない。

具体的には、まだ残っているであろう数より3つほど少ないのだ。そこで詩衣は篤紀が詩衣に内緒で食べたに違いないと思い、先程の言葉を発したのだった。（事実、詩衣の家に自由に出入りできるのは篤紀しかいないので、100%篤紀が食べたのだが。）

勿論、詩衣はその事に対して、本気で咎めるつもりなどなく、寧ろじゃれあいの一貫として言っただけだった。

しかし、篤紀は詩衣のその言葉に完全に想定「外」の反応を示した。大袈裟なくらい神妙な面持ちで、顔面には狼狽の色が浮かんでいる。

そして篤紀は、地面に掌をつき完全に土下座のポーズで「ごめん」と一言だけ口にした。

流石に詩衣も、たかがチョコレート菓子の事でそこまで真剣に謝られたのでは些か居心地

が悪くなり、戯けた柔らかい表情を篤紀に向けた。

「やだなあ、篤紀。私別に怒ってないよ…そりゃあ、チョコレートは好きだけどさ。」

「……………え？」

どうやら、篤紀はチョコレート菓子のことを詩衣が言っていて、自分が思い違いをしているということに今気がついたようだった。

「だから…冷蔵庫のチョコレート！篤紀勝手に食べたでしょ？」

「あ、…ああ、ごめん。」

篤紀の異様なまでの慌てぶりに詩衣も、何かが変だと思い、続けた。「私は、チョコレートのこと言ってたんだけど…。篤紀は違うの？」

「…いや。」

篤紀からの返事は、何とも歯切れの悪い物だった。そして、この返事が詩衣の中で確信に変わるものとなった。

「…何を隠してるの？私に秘密にしていることでもあるの？」

詩衣は真っ直ぐな眼差しで篤紀を見た。

篤紀も同じ様に詩衣を見ている。

しかし、その瞳の奥に詩衣は映っていない。
詩衣の「方向」を見ているだけで、篤紀の目に意思は感じられなかった。

やがて、暫しの沈黙を破るかの様に篤紀が話しはじめた。
何かを決心したように、ゆっくりと口を開いた。

「うた、ごめん。…5日前、華と会ったんだ。」

願望（後書き）

この話に出てくる、人物？企業は実在するものとは一切の関係がありません。

全てフィクションです。

ですから、軽い気持ちで読み流して頂けると有難いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7833y/>

微笑みの詩

2011年12月21日13時57分発行